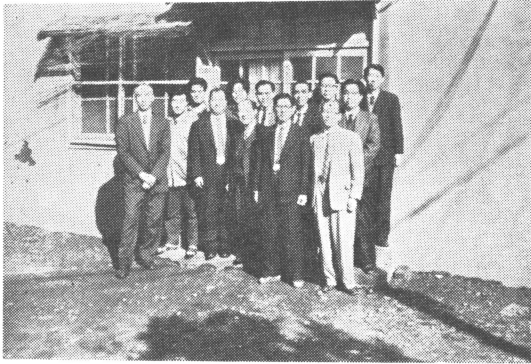


地方だより

長期予報管理官室



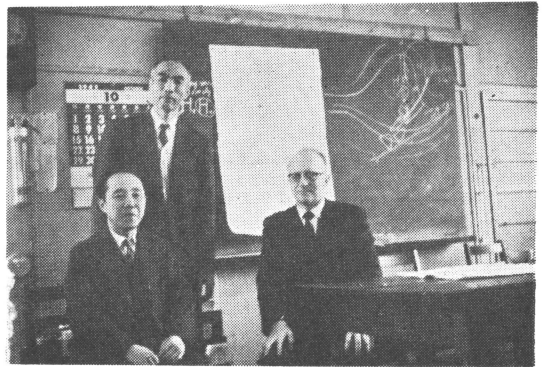
長期予報管理官室の近況

「もしも長期予報課ですか、今年の冬の予想をおうかがい致したいのですが」 「そちら様はどなた様ですか、冬の予想といっても色々ありますが、どこの予想で、何にお使いになるのでしょうか」 「これは大変な礼しました、実は製薬会社なのですが、寒いか暖かかの予想によって風邪引きが大へんちがうので薬のうれゆきに非常に影響があり、この点について予想をうかがいたかったのです。」 「まだ先のことですから月平均位の天候しかわかりませんが、今年の12月は、比較的季節風が弱く気温は高目のところが多く、北陸と北日本の一部では降雪量が平年より多目となるかも知れません、1月中旬頃には曇雨天の日が多く、気温は北日本で低目となるほかは、平年並の程度、北陸方面では12月に引続いて降雪量が多くなると思われます。もちろん気温が平年並と云っても冬ですから寒、暖の変化が非常に大きいのですよ。」 「どうもありがとうございました。」 大体最後の話はすっかりのみこんだように打ちきった話が多いが、妙にべたつくのは女性からの電話である。女性なのでうっかりくわしく話をしていると、なおも追求され、終りはシンギュラリティでごまかすより仕方がない。「運動会をおやりになるなら10月14日になさったらよいですよ、

80%保証します。」保証するのは自然なのだが、自分が保証するような顔をして答える。幸いこの2、3年東日本では晴天にめぐまれているので、この予報仲々評判がよい。

ここしばらくは数値予報ブームの感がある。暖冷防つきビルに対して、こちらは日かげの工場跡である。しかしだからと云ってひがんでいわけではない、大体ひがむどころのヒマはないのである。太陽活動から北半球、極東域と北半球をまたにかけて見てあるく、そのかわり、いろいろの立場から出た予報結果は変わっていることが多い。このプラス、マイナスに振動する級数を何とか収斂させるのが予報会議だが、未知な問題が大きいなりに、また将来の可能性に対しての夢も小さくないのである。ここ気象庁予報部長期予報管理官室と云う所、予報課と気象研究所から分れて一家をなしたのが昭和33年5月、現在管理官他13名、あごががたつく名前、課名と管理職名が同一であるわずらわしさはむしろ部外から云われることが多い。最近日本の気候変動も転換期にきていることが云われだしている。これからの暖候期予報は非常にむづかしくなることであろう。

(小嶋磐雄記)



ベルゲン気象台のスコールSTEIN氏来訪の折
(36年10月25日)

☆

☆

☆

☆